國學院大學学術情報リポジトリ

円仁の足跡を訪ねて(X)-陝西省-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 仁美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001430

円仁の足跡を訪ねて（X）
―陝西省―

三輪仁美

論文要旨

天台僧円仁（慈覚大師）は、承和五年（八三八）に入唐して五臺山の聖跡を巡礼し、長安の寺院で受学したあと、同十四年に帰国するまでの模様を『入唐求法巡礼行記』に記している。その記述をもとに円仁の巡礼ルートを復元し、日唐の交流・交通等の諸相を研究することを目的として、入唐求法巡礼行記研究会はこれまでに幾度かの現地調査をおこなった。本稿は、五臺山の巡礼を終えた円仁が唐の都・長安へと向かう地点を辿った、二〇一四年度の調査を報告するものである。陝西省渭南市大荔県から西安市臨潼区までの道程を確認し、大荔県と「王明店」比定地、故市鎮と関山鎮、康橋村から櫟陽村とを結ぶ道路遺構を発見し、円仁の巡礼ルートの復元だけでなく、唐代の交通を考えるうえでも重要な成果が得られた。また故市鎮の移転など、既存の文献史料では得られない情報も入手し、現地調査の重要性および緊急性を改めて再認識した。

はじめに

天台僧円仁（慈覚大師）は、承和五年（八三八）に入唐して五臺山の文殊菩薩の聖跡を巡礼し、長安の寺院で受学したあと、同十四年に帰国する。その旅行記『入唐求法巡礼行記』（以下、「行記」と略称する）の内容は、円仁が同行した遣唐使の姿だけでなく、在唐新羅人との交流、中国（唐）各地の交通、風俗、物価等にも及ぶ。さらに旅行にかかわる公私文書が転載され、仏教弾圧（会昌の廃仏）の様子についても活写されていることから、当該時期の東アジアにおける仏教文化や社会・経済状況を理解するうえで、「行記」はき

わめて重要な史料である。

円仁の足跡は広範囲に及んでおり、これまでに多くの論考で取り上げられてきた[1]。平成二十四年～二十六年度科学研究費補助金の基盤研究（B）「日本古代の仏教受容と東アジアの仏教交流」（研究代表者・佐藤長門）に携わるメンバーによって構成された「入唐求法巡礼行記研究会」は、「行記」をもとに円仁の巡礼ルートを復元し、日唐の交流・交通等の諸相を研究することを目的として、これまでに幾度かの現地調査をおこなっている[2]。本稿は、前述の科学研究費補助金基盤研究の一環として実施した、平成二十六年（二〇一四）度の調査の内容と成果を報告するものである。

本調査は、平成二十六年十二月二十四日（水）から二十九日（月）までの日程で、陝西省渭南市大荔県から西安市臨潼区までの道程を確認した（図1）。五臺山の巡礼を終えた円仁が唐の都・長安へと向かう、「行記」開成五年（八四〇）八月十三日条から十九日条に該当する地点を辿ったのである。前回（二〇一三年度）の調査では、円仁が黄河を望み、その渡河点と推定される蒲津関（山西省運城市永済市）までのルートを確認したので[3]、今回の調査対象はその対岸から京兆府界櫟陽県（西安市臨潼区櫟陽鎮）までの地域に設定した。櫟陽鎮および長安城跡周辺は平成二十年（二〇〇八）度に調査を終えており[4]、これで円仁の「入唐求法巡礼」の往路は概ね追体験したことになる。

日本からの参加者は、研究代表の佐藤長門氏（國學院大學、以下調査当時の所属を記す）、連携研究者の金子修一氏（同）・笹生衛氏（同）・石見清裕氏（早稲田大学）・田中史生氏（関東学院大学）、研究協力者の山﨑雅稔氏（國學院大學）・王海燕氏（浙江大学）、研究補助員の河野保博氏（京都造形大学）・柳田甫氏（國學院大學大学院生）・伏見和也氏（同）、および筆者の一一名で、中国からは葛継勇氏（鄭州大学）が合流した。以下、現地調査の内容と成果を日程順に詳述する。

第一日目　十二月二十四日（水）　東京→西安

日本からの参加者は、羽田空港国際線ターミナルの出発ロビーに七時三〇分に集合した。日本の家電製品―炊飯器が人気のようであ

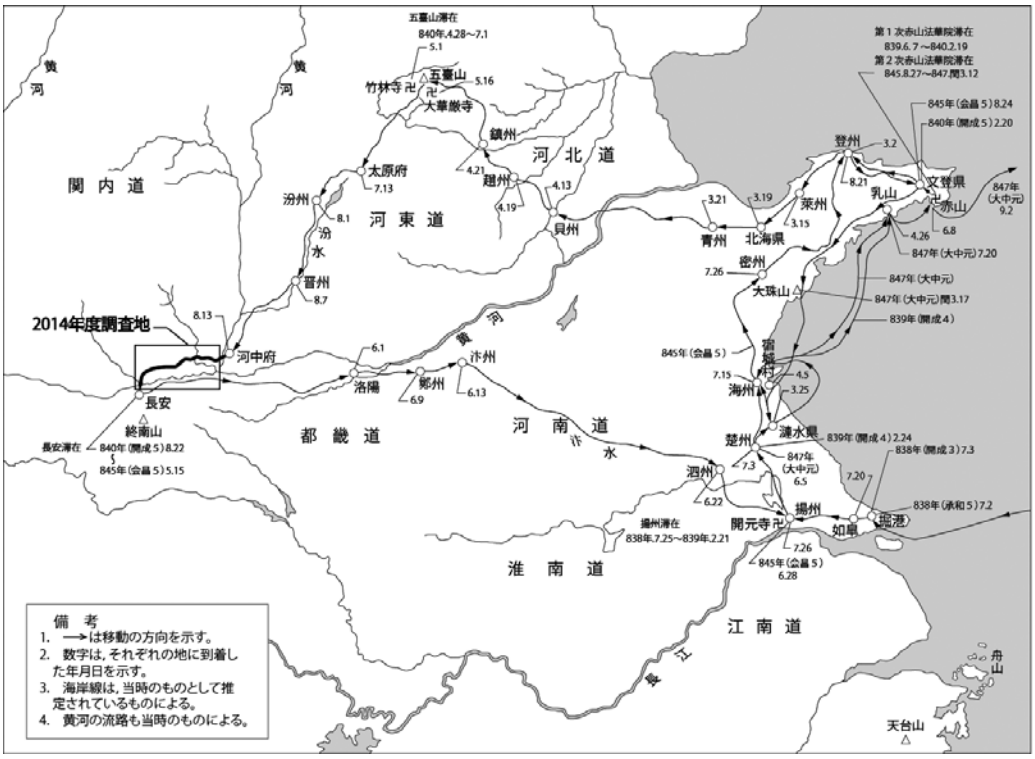

図１　2014 年度調査地（１）
河野保博作成「円仁在唐行程図」（鈴木靖民編『円仁とその時代』〈高志書院、2009 年〉所収）に加筆した。

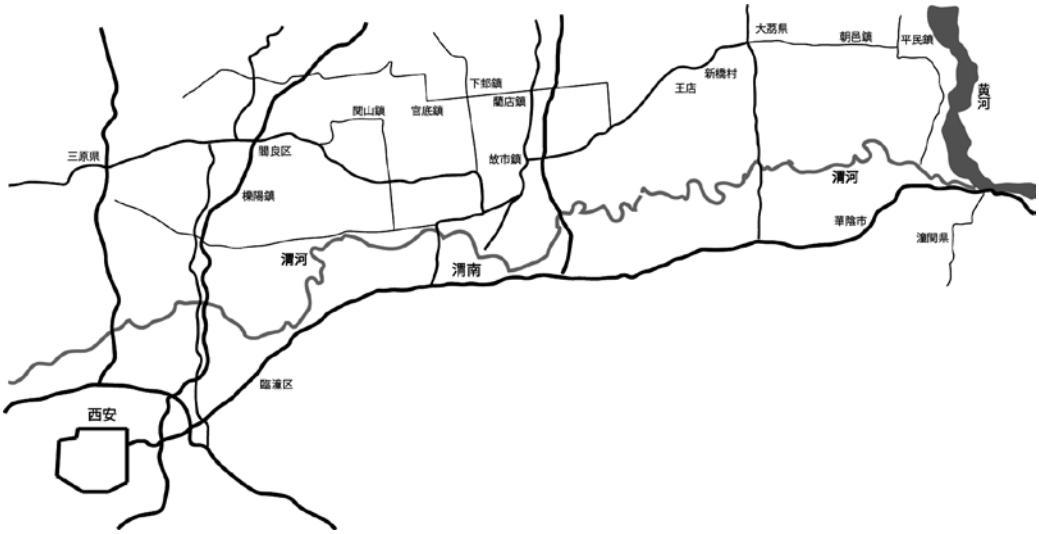

図２　2014 年度調査地（２）、筆者作成

る―を買い込んで帰国の途につく中国人観光客、年末年始を海外で過ごすと思しき日本人旅行客で空港内は賑わっている。出国手続きを終えたあと、現地でお世話になる方々への土産を購入した。経由する北京上空の航路が混雑していたため、ＡＮＡ一二五五便への搭乗は予定時刻より四〇分ほど遅れ、一〇時七分に羽田を離陸した。フライトは順調で、一二時五三分（日本時間では一三時五三分。以下、現地時間で表記する）に北京首都国際空港に到着した。

空港は広く、預けた荷物を受け取るにもモノレールでの移動を要し、さらに国内線ターミナルへ走るシャトルバスの乗り場を係員に尋ねるものの、転々とたらい回しにされてしまった。ようやく国内線ターミナルに着くと、搭乗予定時刻まで一時間をきっていた。間一髪で国内線ＭＵ二一一二便に乗り込み、一五時〇七分、ほぼ定刻で西安に向けて北京を離陸した。機内ではホットドッグとカフェオレが提供された。一方、航空会社の都合によりビジネスクラスに案内された笹生氏には、ローストビーフやカナッペ、ドラゴンフルーツなどが振る舞われたようで、この一件は最終日まで話の種にされることとなる。

一六時五〇分、西安咸陽国際空港に到着した。飛行機を降りると、晴天にもかかわらず周囲は白っぽく霞んでいた。昨今、国際的にも話題になっている中国の大気汚染を目の当たりにしたのである。さて、空港では陝西省文物国際旅行社の薛東風氏、ドライバーの周正氏が朗らかな笑顔で出迎えてくれた。薛・周両氏には、二〇〇八・〇九・一一・一三年度の調査でもお世話になっている。周氏運転のマイクロバスに乗り込み、宿舎へと向かう。唐の皇帝が居住し、政治と文化の中心地となった大明宮跡（現在は大明宮国家遺跡公園として整備されている）を車窓から眺め、一九時七分、宿舎の古都新世界大酒店に到着した。クリスマスムード一色のロビーはツリーや電飾で華やかに装われており、吹奏楽や聖歌隊による催しもおこなわれていた。そこで葛継勇氏と合流し、さらに前回の調査でもお世話になった拝根興氏（西安電子科技大学）の姿もあった。拝氏は調査地である渭南市大荔県のご出身で、調査地域に関する情報が得られればと、金子氏を通じて宴席にお招きしたのである。一九時四〇分から二時間程、宿舎内のレストランで拝氏を囲んで会食した。学術的な事柄から年代物の白酒に至るまで様々な話題で盛り上がり、歓談が途切れることはなかった。会食後、拝氏を迎えに来た王坤氏（陝西師範大学）としばしの間再会を喜び、両氏とはホテルの前でお別れした。その後、各自で持ち寄ったバラエティー豊かな酒類を横目（あるいは片手）に、調査の打ち合わせをする。翌日からの調査に備えて五〇分程で切り上げ、就寝した。

第二日目　十二月二十五日（木）　潼関県、大荔県平民鎮

調査初日である。午前は西安市より一五〇キロほど東の渭南市潼関県の、午後は円仁が開成五年八月十三日に辿ったルートの踏査をおこなった。

（一）潼関古城

潼関県は陝西省の東端に位置し、山西・河南両省に接する。北には渭河が西から流入し、南西には秦嶺山脈の秀峰・華山がそびえている。南流してきた黄河は華山にぶつかり、渭河を加えて九〇度方向を変えて東に流れる。潼関は古来洛陽―長安間における交通の要衝であり、後漢末期の建安十六年（二一一）、曹操と馬超・韓遂ら関中十部の反乱軍との戦いがこの一帯で繰り広げられる（潼関の戦い）[5]など、関中の戦乱時には争奪の地となった。円仁は復路において潼関を通過しており、「行記」に「是れ国城の咽喉なり」と、潼関が長安にとって要衝の地であることを書き留めている（会昌五年〈八四五〉五月二十二日条）。黄河および渭河周辺の交通路を確認しておこうと、古代の城塞や、それに連なる潼関十二連城などの遺跡の見学を予定に組み込んだ。

八時五分に、宿舎を出発する。間もなく、笹生氏が手荷物に眼鏡がないと声をあげた。ところが、宿舎に引き返そうと信号が青に変わるのを待つ間、眼鏡は氏がすでに着用していることに気づいた。薛氏によると、このようなことを中国では「驢馬に乗って驢馬を探す」と表現するらしい。車内は笑いに包まれ、潼関県に向けて改めて出発した。

西安から兵馬俑（始皇帝陵付近）までは高速道路が修理のために封鎖されていたので、しばらくは国道一〇八号線を道なりに進む。気づくと驪山の麓、華清池の脇を通過していた。山麓に温泉があり、秦の始皇帝はここで瘡を治療したと伝えられている。また唐の玄宗は楊貴妃のために華清池を造り、二人の逸話を歌った『長恨歌』には、「驪宮高き処青雲に入り　仙楽風に飄へりて処々に聞こゆ」、「春寒くして浴を賜ふ華清の池　温泉水滑らかにして凝脂を洗ふ」と描写されている。さらに北上し、兵馬俑で高速道路に入る。まだ

写真１　潼関古城から望む渭河（左）と黄河（右）
（佐藤長門氏撮影）

一時間程かかるということで、九時三二分、パーキングエリアで休憩をとる。そこには小さな売店があり、当座のミネラルウォーターを購入した。その後、九時四七分にバスに戻り、再び東に向かって進む。

高速道路を下りたのは一〇時四八分、そこから県道二〇四号線（港安路）を南下し、南街村に入る。南西にそびえる山の頂には十二もの烽火台があった。おそらく、潼関十二連城の跡であろう。一一時、何人かは降車して徒歩で見学を開始した。一方、筆者を含めて車内に残った者は、そのままバスを走らせて斜坂道を進み、一足早く高台に向かう。そこでは黄河と渭河の合流点を望むことができた（写真1）。円仁は東岸からみた黄河の流れを、「黄河は（河中府―筆者注）城の西辺より南に向かひて流る。黄河は河中府より已北、南に向かひて流れ、河中府の南に到りて便ち東に向かひて流る」と記している（八月十三日条）。「行記」の記述通りの景色に、我々は目を見張った。周囲には楼閣建築と城壁の一部が現在も残っており、そのうちの一棟には「紅楼観」の名を確認した。楼観とは物見のために高く造った建物であり、河の南側、山の北側という地形を活かした、監視の役割を担った施設であろうか。黄河および渭河の交通上、この地点が重要な機能を果たしていたことを物語る。

ひとしきり歩き回ると、寒さが身に染みてくる。一一時三〇分、昼食をとるために潼関古城をあとにした。再び高速道路で、西に戻るかたちで進む。「華山の北」を意味する華陰市に入り、一二時二〇分、国道―地元では華山路というらしい―沿いのホテル「華山客楼」で昼食をとる。昼食後、腹ごなしに裏庭へ出ると、間近に華山をみることができた。一三時一八分、大荔県市街地へ向けて出発した。

（二）大荔県市街地、朝邑鎮

ここから円仁の足跡を辿る調査を開始する。「行記」によると、八月十三日に河中節度府城を出た円仁は蒲津関へ向かい、そこで公験（通行証）の点検を受けて黄河を渡った。小野勝年氏は「行記」と中国側の諸史料の記述を勘案し、黄河の東岸・西岸それぞれに関があったとする。[6]『朝邑県後志』疆城図には、黄河の西岸に「旧太慶関」「新太慶関」の名がみえる。「太慶関」に新旧を冠しているのは、関が移転したことを示す。黄河の下流域は膨大な土砂の堆積により川底が周辺の平面地よりも高く、古代から氾濫を繰り返し、大きく流路を変えてきた。疆城図には河道の変更も描かれており、円仁が通ったと考えられる旧大慶関は河道変更後の黄河東岸に描かれている。また円仁は、着岸地点より西に五里（約三キロメートル）進み、開元八年（七二〇）に新設された河西県の八柱寺という寺院に宿泊している。小野氏は「八柱は八支柱、八支正道などの義と河橋の八体の鉄牛とを合わせ意味し、これを寺名にしたもの」と推測している。寺跡は未詳であり、大慶関とともに、現在の黄河東岸または川底に沈んでいるものと考えられる。

前回の調査では、蒲津渡遺址博物館において鉄牛や鉄柱などの野外展示を見学した。このことをふまえて、黄河を挟んで対岸の大荔県平民鎮付近でも類似するものをみつけるため、まずは地図を入手しに大荔県市街地へと向かった。一四時三〇分、県の中心部・城関鎮で新華書店をみつけ、地図を購入した。黄河沿岸に向かって大朝公路を東に進むと、朝邑鎮に入る。ここは円仁が八月十五日に、河西県八柱寺より西に三〇里（約一八キロメートル）進み、某店にて食事を摂った「朝邑県」に比定される。朝邑県の県治は『太平寰宇記』では同州の東三五里（約二一キロメートル）、『大清一統志』や『読史方輿紀要』ではともに同州東三〇里とし、「行記」では朝邑県―同州間の距離は三五里としている。同州は現在の大荔県付近に比定されており、現在の朝邑鎮から真西に約一五キロメートル、里数に換算すると三〇里弱の位置にある。また『朝邑県後志』村鎮図では、朝邑県と新大慶関を結ぶように村落が分布しているが、そのような村落（遺称地）は現在の地図上では確認することができない。また小野氏は、円仁が立ち寄った「店」は県城内の宿屋を兼ねた飲食店とする。加えて五臺山巡礼後の記事に散見し、特に山西・陝西両省の幹線道路沿いに設けられている様子から、首都と北都との交通や五臺山巡礼との関連を指摘する。ただ、「行記」には朝邑県管内に所在したこと以外記載がなく、現在地の比定は困難である。やむを得ず朝邑鎮の名が書かれた看板を撮影することで、地点の確認とした。[7]

一四時五七分、さらに東に進んで大寨子村に入ると、今度は古い建物跡群が視界に入ってきた。清代末期の食糧倉庫、天下第一倉と呼ばれる豊図義倉遺跡である。立ち寄って見学すると、版築の遺存状態は良好であり、城壁の如き形状であった。近隣には金龍寺もあり、散策を続けた。金龍寺は唐の貞観元年（六二七）に建立され、明の嘉靖三十四年（一五五六）に大地震で倒壊し、明代末期に修復された寺院である。現存する煉瓦積みの塔は日本では珍しい八角七重の形式であり、基層は唐代に遡るという。塔に入って見上げると、天井には穴が空いており、吹き抜け状になって上層部までみることができた。塔の外壁に嵌め込まれた「東岳老爺遊司醡碑」には明代末期の崇禎四年（一六三二）の年紀をもち、「同州朝邑県」と地名が刻まれているのを確認した。

袋祠岑楼にも足を運んだ。ここは春秋時代の工匠・魯班（公輸班）による建造と伝えられており、唐の貞観元年（六二七）に修理を加え、さらに明の隆慶六年（一五七二）には殿宇を増築したという。現在に遺る楼は宋代のものである。楼に登って周囲を見渡す。空気が澄んでいれば、黄河や華山を一望できたであろう。小一時間ほど見学し、一六時一〇分、バスに乗り込み黄河へと向かった。

（三）大荔県平民鎮

一六時一九分、黄河沿岸の平民鎮に入り、地図にない道を東に進む。幸いに路肩で一時停車していた地元の男性がいたので、黄河がみえる場所への行き方を尋ねると、自身の車で先導すると快く応じてくれた。男性に導かれて黄河沿岸の車道に出ると、牛のモニュメントが置かれた広場を目にした。一旦通過し、河岸に降りられるところまで車を走らせ、そこで礼を述べて男性と別れた。黄河（写真2）を望みつつ、前回の調査でみた光景が脳裏をよぎった。前回は東岸の村々を訪れ、村人のキャベツ畑にお邪魔して遠く対岸に陝西省の街をかすかに認めたが、それはいま我々が立っているところなのであろうか。また、円仁が黄河渡河後に通過した関や寺院、道路等は、大部分が眼前に沈んでいるのかと思いを馳せた。

黄河の形状や流れを確認したのち、先に通過した牛像の置かれた広場へと戻ることにした（写真3）。その時刻は一七時で、日暮れが近づいている。広場の説明板によると、この牛像は二〇一一年に竣工した護岸工事の際に建てられたもので、残念ながら蒲津渡遺址博物館でみたような出土遺物ではなかった。一七時七分、バスに乗り込み、平民鎮を後にして宿舎に向かった。

写真２（右）　西岸（陝西省大荔県平民鎮）からみる黄河（田中史生氏撮影）
写真３（左）　鎮護岸工事のモニュメント（佐藤長門氏撮影）

途中でガソリンスタンドに寄り、一八時に宿舎「黄河賓館」に到着した。各自部屋で休憩をとり、一八時三〇分にロビーに集合した。別館にある食堂に移動するも、宿泊手続きの際に提出したパスポートが返却されず、妙な不安を覚える。ただ、葛氏がメニューを手にして座ろうとした途端、河野氏が偶然にその椅子をずらし、葛氏が転びかけるという一幕もあり、張り詰めかけた場の空気が和んだ。食後、二〇時三〇分から翌日の予定、特にどの地点を重点的に調査するかについて打ち合わせ、就寝した。

第三日目　十二月二十六日（金）　大荔県城関鎮、羌白鎮

早朝、王氏と筆者が宿泊した部屋では、洗面台の水が出続けるというハプニングに見舞われた。また佐藤・田中両氏は、朝食が「賓館」に似つかわしくないと嘆いていた。この宿舎には連泊するため、参加者のスーツケースの積み込みに悩まされることなくスムーズに乗車し、八時四七分に出発した。この日はまず市街地周辺の史跡や同州故城の範囲（城域）を踏査し、次いで円仁の巡礼ルートを辿る予定になっていた。

（一）大荔県文物旅游局、文殊新塔

大荔県の市街地北部、北大街と北環路が交わる地点に面して文殊新塔が所在する。もとは「文殊塔」といい、かつての長興万寿禅院の「文殊閣」に因むという。文殊閣は、北宋の淳化五年（九九四）に建てられた三層百余尺の建物で、文殊菩薩の塑像を有していたことから名づけられた。文殊閣自体はすでに倒壊しているが、清の道光二十年（一八四〇）に文殊閣

の址に四層塔と碑が建てられ、「文殊塔」と呼ばれた。光緒四年（一八七八）には塔の上層に三層を増築するも、戦災によって半壊してしまった。民国二十五年（一九三六）、長興万寿禅院の旧跡に方山公園を建て、また文殊塔をもとに文殊新塔を建立し、現在に至る。その文殊新塔の西には同州大興国寺址がある。『隋書』によると、隋の文帝は大統七年（五四一）、馮翊（現在の大荔県）の般若寺という仏寺で誕生した[8]。般若寺は北周の武帝により廃毀されるが、文帝はこの寺跡に護国のための大興国寺を建立したという。「行記」は洛河渡河後について、「馮翊県の安遠村の王明店に到」ったと記す（八月十六日条、後述）。円仁に直接関係するのか不明だが、調査地に加えることとした。

大興国寺址には、仁寿元年～四年（六〇一～〇四）に文帝によって造られたとされる仁寿舎利塔が存在するらしく、情報を求めて大荔県文物旅游局を訪ねた。八時五四分、陳暁琴氏と面会して話を伺うと、件の舎利塔は頭頂部のみ残存し、また大興国寺址から「舎利塔下銘原石」という石碑が発見されたという[9]（現在は大荔県文物管理委員が所蔵）。また陳氏のご厚意により、文物旅游局に横積みされている石碑、金の承安三年（一一九八）の年紀をもつ鐘、さらに数十部しか刊行されなかったという貴重な石刻資料集を閲覧させていただき、さらに大荔県の地図―「旅遊指南」であったが―も頂戴した。九時二二分、陳氏に大興国寺址をご案内いただくため、バスに戻る。文物旅游局を出て西に進んだが、道すがら公園では、太極拳で体を温める老人の姿がみられた。九時二六分、文殊新塔に到着する。寺址は現存しておらず、文殊新塔も一九八〇年代に修復されたものらしい。戦災によって損壊しているが、下層部には古い石積みが残っている。また前日にみた金龍寺塔と同様、八角七層からなっており、市街地のランドマークになっていた。しかしながら、石段や塔の外壁には様々な落書きが施されており、まるでメッセージボードのようであった。このような文物（文化遺産）への落書きは北京などでも横行しているといい、文物破壊が深刻化している状況を目の当たりにした。

（二）同州故城跡

朝邑県の某店（前述）での食後、円仁は同州の靡化坊の天王院に到り、そこで宿泊する（八月十五日条）。文物図には現在の大荔県市街地に、唐代の遺址として「同州故城」を確認できる。ただ、靡化坊は城内の坊名を思われるが、他の史料にみえず、遺称地名等も

確認できない。天王院についても、「行記」には宝鼎県天王院や故市店天王院（後述）がみえるが、いずれも現在地を比定し難い。ひとまず城域を確認するため、遺称地名を探し回った。県中心部には「城関」と城に関わる地名が遺っており、これまでの調査では遺称地名によって四至の把握を試みている。

城域について陳氏に問うと、引き続き案内してくれることとなった。九時四四分、同州故城の南門跡に向かう。立ち並ぶ店のなかに古い門（創建年代は不詳）が遺っていた。またその門が跨ぐ道は「南関路」と呼ばれているという。次いで一〇時八分、城壁が遺っているという場所に案内してもらうため、南環路を東に向かって進んだ。そのとき、薛氏の携帯電話に宿舎より電話がかかった。大荔県公安局が我々の宿泊目的を宿舎に問い質しているというのである。不穏な雰囲気になりつつも、刀削麺店が軒を連ねる東大街を進み、「東関派出所」（警務室）前に到着した。「東関」推定地である。ほどなくこの地域の住民組織（日本でいう町内会か）、東大社区居民委員会の女性、楊春霞氏に話を聞くことができ、城壁跡に誘導してもらった。それは南関からほぼ真東に進んだところにあり、城の東南に位置する。さらに楊氏の情報では、かつて東南門が構えられ、東西に道路が走っていたという。

一〇時三四分、陳氏をお送りするために文物旅游局へ向かった。陳氏は王氏をともなって文物旅游局に戻り、二〇〇八年度に東関推定地付近を調査した際の資料をコピーしてくれた。礼を述べて陳氏と別れ、西関推定地へと向かう。西大街を西に進み、地図上では「西関村」とある地点に至った。一一時七分、「西関超市」（スーパーマーケット）や「西関医院」等の写真を撮り、地名を確認した。

次いで頂戴した資料をもとに、東側の城壁を探すことにした。東に戻って西大街、そして東大街を抜け、雲棋路を北に入る。初老の男性に城壁の有無について尋ねると、体育路に存在したとの情報を得る。男性に導かれてマンションの敷地内に入れてもらうも、整備工事で撤去したのか、城壁らしきものは確認できなかった。さらに複数人に聞き込みを試みると、もう一つ城壁があるという。体育路をさらに西に進むが、新しい廟が建っているだけであった。そこへは体育路を西に進んできており、先ほど確認した東南隅の地点から直線上に位置しない。これらの地点を東関に比定するのは不適切であるとの結論に至り、東関推定地の確認は断念せざるを得なかった。

一二時、市街地へと戻り、大衆食堂「関中老碗面」において昼食をとった。地元の麺料理で体を温め、午後の調査に乗り出そうとしたが、一旦宿舎へと戻らなければならなくなった。薛氏に連絡が入った件で、大荔県公安局が我々の身元を確認したいという要請によ

るためである。一二時五五分、薛氏と葛氏、そして王氏が事情を説明しに宿舎へと入り、我々は恐々としながらバスで待機する。しばらくして三氏がバスに戻る。どうやら、この宿舎に外国人旅行者が宿泊するのは初めてのことで、前日に提出したパスポートをコピーする際に不備が生じていたという。またしても「賓館ではない」と、不満の声があがった。幸いにも、諜報の嫌疑をかけられて一網打尽、などという洒落にならない事態を免れることができた我々は、一三時二五分、気を取り直して宿舎を出発した。

（三）洛河渡河点

ここからは「行記」八月十六日条の行程を辿る。円仁は同州靡化坊天王院から「西に行くこと十里（約六キロメートル）」で洛河を渡ったあと、さらに「西に行くこと十里」で馮翊県安遠村の王明店に至り、降雨のため村院で宿泊している（八月十六日条）。洛河はオルドス（内モンゴル自治区）南辺の定辺県付近より発し、南流して甘泉・鄜・中部・澄城の諸県を経て大荔県に西南に至る。現在は大荔県から東流し、朝邑鎮の南方を流れて黄河に注ぐが、かつては渭河に注いでいた。『陝西通志続通志』同州疆城図には洛河上に複数の船が描かれており、「〇〇渡」とあって渡し場の存在が推定できる。円仁も、これらの渡し場を用いて洛河を渡ったのだろう。

円仁の洛河渡河点については、洛河の河道変更等もあり、現在地を比定することは困難である。まず大荔県市街地から洛河へと続く道路を確認するため、国道一〇八号線を西南に向かって直進する。南七村、谷多村を経、一四時二八分、洛河を越えて羌白鎮の新橋堡に入る。円仁の渡河点に関する手がかりを得ようと、東北に接する新橋村方面へと歩く。すると、耕作地のなかに整った窪地を発見した（写真4）。直線的な形態であり、その壁には古い煉瓦積み（写真5）があることから、道路遺構ではないかとざわめく。すると笹生氏が、この一帯の衛星画像を確認しようと提案した。闇雲に歩くよりも、効率的に窪地がどこまで伸びているのか把握できるだけでなく、地図には示されていない微細な道路や地割が写っている可能性があったのである。かかる手法は本研究会の調査でははじめての試みであり、笹生氏の経験にもとづく知見と、インターネットで提供される情報の進展に驚くばかりであった。早速Google Earthで新橋村を含む羌白鎮周辺の画像をみると、村の東北隅から西南方向へ走る線が認められた。この線こそ、我々が立っていた窪地である。さらに我々を興奮させたのは、東北で途切れている線を延ばせば洛河に到達し、さらに線は南西に延びており、それを辿ると次の調査

写真４（右）　新橋堡で発見した窪地（笹生衛氏撮影）
写真５（左）　窪地の壁面（佐藤長門氏撮影）

地である「王明店」遺称地（後述）へと繋がっていることであった（写真６）。聞き込みのために窪地を辿り続けると、羊九匹―犬が一匹混在―を率いた男性に出会った。年賀状に使えると羊を撮影しつつ、窪地の用途を問うと、かつては道路であり、北進すると大荔県市街地に、南進すると西安市に至ると教えてくれた。現在の主要道路は我々が通った、この北を走る国道一〇八号線であるが、一昔前まではこの窪地（道路跡）によって大荔県と西安市が結ばれていたのである。つまり円仁は同州靡化坊天王院を発ち、西南（「行記」では「西行」と記載）に進んで洛河を渡り、この道路を通って「安遠村の王明店」へ向かったのではないだろうか。「王明店」遺称地から遺構を辿って洛河に到達するまでの距離は約五キロメートル。「行記」が記す洛河―王明店の間は「西に行くこと十里」（約六キロメートル）とあり、概ね対応するとの結論で一致した。

（四）安遠邑王明店

興奮が冷めやらぬままバスへと戻り、一五時四〇分に「王明店」遺称地へと向かった。「王明店」が属する安遠村の現在地は不詳であるが、小野氏は「同州と蕃駅（藩駅鎮）を結ぶ道路上に王庄という地名があり、里数および名称において王明店と関係のあるを推さしめる」とする。現在、小野氏のいう「王庄」なる地名は確認できないが、新橋堡の南西に「王店」という地名がみえる。大荔県から西南に約一〇キロメートルに位置し、「行記」が記す同州靡化坊天王院―洛河―馮翊県安遠邑王明店の間二〇里と対応する。

一五時五六分、地図上で「王店」とされる地（南庄村北辺）に到着するも、地名を明記した看板や標識の類はなく、廃墟と化していた。村人への聞き込みもかなわず、次の調査地へ

写真６　新橋堡周辺

と向かうことにした。新橋村から伸びる道路遺構を発見し、幸いにも並行して走る小道があったため、それを利用して西に進む。

（五）蕃駅店

ここからは八月十七日条の行程を辿る。円仁は村院から「西に行くこと十五里（約八キロメートル）」で蕃駅店に至り、高家にて食事をとったのち、「西に行くこと卌里」で故市店に到り、天王院で宿泊している。小野氏は、大荔県の西南三〇里余に「藩駅鎮」があり、『大清一統誌』によれば大荔県から西方三〇里にあるとされ、「行記」は西方三五里（同州靡化坊天王院―洛河間の一〇里＋洛河―王明店間の一〇里、村院―蕃駅店間の一五里）とするも同一地点とみなしている。小野氏のいう「藩駅鎮」は確認できないが、「バン」の音を含む地名として北藩駅および南藩村が現存する。いずれも前述の王店からの距離は七キロメートル強、この近辺に蕃駅店を比定できるのではないかとの推測のもと、王店から北藩駅および南藩村へと向かった。一六時二〇分、八魚郷に到着し、清代の石墓群を眺める。バスに戻り、再び西南に進む。途中、道路遺構は北王閣付近で分岐し、一方は北藩駅へ、

もう一方は南藩村へと延びていた。まず北藩駅を訪ねるも、地名を示した看板が見当たらなかったため通過した。次いで南藩村に到着する。一六時四五分、村人に地名を尋ね、ここが南藩村であることを確認する。聞くところによると、北藩駅では婚儀、南藩村では葬儀を執りおこなっているという。邪魔にならないよう村の東端でバスを停め、道路遺構を探した。Google Earthに依拠して推定位置まで歩くと、畑に埋もれるようなかたちで遺構を確認した。ただ目視および空中写真で遺構と判別できるのはその地点までで、その先は耕作地で潰されてしまっており、円仁が蕃駅店の次に立ち寄った故市店へと通じる道はすでに失われているようなので、この日の調査を終了した。

一七時五三分に南藩村をあとにし、三〇分程度で宿舎に到着した。夕食は前日と同様、宿舎の別館でとることにしたのだが、よくみるとその部屋番号には「国賓」と冠されていた。昼間の出来事を思い返すと、少々複雑な気分になる。食事中は調査の成果、殊に道路遺構に関する話題で持ちきりであった。その後、二〇時三〇分から翌日の打ち合わせをおこない、就寝した。

第四日目　十二月二十七日（土）　渭南市臨渭区故市鎮・官底鎮、西安市閻良区関山鎮

前日の続きで、まず蕃駅店高家での食事後に円仁が向かった故市店天王院に関する調査をおこなった。故市店は現在の渭南市臨渭区故市鎮がその遺称地名と推定される。とすると、大荔県と故市鎮との間は国道一〇八号線で結ばれており、現在も主要な交通路であることが確認できる。ただしこのルートについては、本研究会の事前の打ち合わせで疑義が示されていた。八月十七日から十八日、そして十九日条の行程が、遺称地名からは理解し難いからである。かかる三日間の行程を、「行記」は次のように記載している。

十七日。雨止む。西に行くこと十五里。蕃駅店に到り、高家にて断中す。西に行くこと卌里、故市店に到り、天王院に入りて宿す。

十八日。遅く発つ。西に行くこと廿五里。永安店に到りて断中す。斎の後、西に行くこと卅五里。新店に到る。卅来の家を経て、宿処を覓めるも得ず。強いて趙家に入りて宿す。

十九日。南に行くこと卅里。京兆府界の櫟陽県に到りて断中す。（後略）

十八日条の永安店および新店については遺称地名を確認できず、史料上にも関連記事をみいだせないため、ひとまず蕃駅店から櫟陽県への移動に注目する。現在の故市鎮から櫟陽県比定地である西安市臨潼区櫟陽鎮まではほぼ真西に進むが、「行記」ではこの間の移動を「南に行くこと卅里」としており、方向に疑問が残る。移動距離にしても、現在の故市鎮―櫟陽県間の距離よりも「行記」が記す距離のほうが長い。小野氏は、現在の故市鎮―官底鎮―康橋鎮―櫟陽県と北に膨らむルートを想定している。しかし、官底鎮は故市鎮の西北に位置しており、それを「行記」が述べる「西に行くこと廿五里」と表現するであろうか。文物図では、現在の故市鎮に遺る文物は明および清代のものであり、比較的新しい街なのではないかとの意見が出された。かつて故市鎮が現在よりも北に所在したとすれば、ルートの問題を幾分かは理解しやすくなるとの目算から、まずは現在の故市鎮で聞き込み調査をおこなうことにした。

（一）渭南市臨渭区故市鎮

この日も天候に恵まれ、八時三五分に宿舎を出発した。前日に通った国道一〇八号線を進み、九時二一分、大荔県と臨渭区の境にあたる来化村を通過する際に九重の楼閣式の塔が目に入った。立ち寄ってみると、それは「全国重点文物保護単位」となっている慶安寺塔（鎮風宝塔）であった。高さは約三〇メートル、塔の創建年代は不詳であるが、明の嘉靖三十四年（一五五六）に地震で倒壊し、同三十七年に再建され、それが現存しているという。我々の目にすぐ留まったように、前近代においても交通のランドマークであったのかもしれない。

九時四五分、バスに乗り込み故市鎮へ向かう。国道一〇八線と省道二〇一号線とが交わる場所に故市鎮はあり、一〇時五分に到着した。看板の地名表記は「故市」と「固市」が混在していた。その理由を地元の方々に問うも不明であったが、かつて故市鎮は現在よりも北側に位置していたと、故市鎮の移転に関する情報を得られた。北西方向に移動し、故市村（旧故市鎮推定地）で聞き込みを再開する。道すがら出会った威勢のいい古老・田紀堂氏に古い建造物の所在を問うと、渭南市固市中学校付近にあることを教えてくれた。さらに田氏は故市鎮の歴史に関する書籍を執筆した方で、「故（固）市」の地名は漢の武帝の時代より存在することを教えてくれ、著書『故市村村志』を二冊も譲渡してくれた。また話題が円仁に及ぶと驚いたように声をあげ、自宅に資料を取りに行ってくれたが、残念なが

ら、その場ではみつからなかった。古い石碑や鐘楼、関帝廟は存在したが、既に破壊されてしまったらしい。唯一遺存する渭陽楼を案内していただいた。渭陽楼は渭南市立固市中学校の敷地内にあり、田氏の口添えがなければ入ることはかなわなかっただろう。渭陽とは「渭河の陽（北）」に所在したことに由来し、唐の鄭谷が「渭陽楼閒望」という詩を残しているという。次いで一〇時四五分、民国時代の旧固市県役所を見学した。清代の石像が点在しており、それを近所に住む主婦が洗濯物を干す紐を括り付けるのに活用するという、驚きの光景を目にした。

（二）慧照寺

一一時、田氏と別れた後、省道二〇一号線を北上する。藺（咨）店鎮で西に折れて省道三一四号線を進み、永楽村を通過し、下邽鎮に至る。そこでは「省級重点文物保護単位」となっている慧照寺の塔を見学した。慧照寺の創建は晋代であり、現存する方形九層にして楼閣式の塔は当初唐代に着工するも未完成で、竣工したのは北宋の咸平二年（九九九）であった。それが明の嘉靖三十四年（一五五六）にこの一帯を襲った地震で倒壊し、万暦九年（一五八一）に再建したという。塔は東北方向に傾き、煉瓦が落下する危険もあるため、普段は閉鎖されているという。隣接する事務所の女性に事情を話し、同行してもらって見学した。塔の前方にある銅仏殿は補修工事用の足組みで覆われていたが、作業が進んでいる気配はない。あとで聞くところによると、塔や銅仏殿を含む寺院全体を復元整備し、地域おこしに役立てようとしたものの、計画が頓挫したらしい。慧照大道（予定地）はシャッター商店街と化しており、そのため食堂を探すのも一苦労であった。薛氏によるとこの地域の名物は羊肉のスープで、実際に「羊肉」という看板を掲げた店が軒を連ねていたが、参加者の好みが分かれたこともあり、一二時四五分、路面で製麺している簡素な店で昼食をとった。中華そば（風）の麺は南瓜のように黄色味が濃く、スープは香辛料を大量に放り込んだような赤さであったが、それ以上に我々を驚かせたのが、発泡スチロール製の容器にビニール袋をかぶせ、その状態で麺とスープが注がれていたことである。経済的かつ衛生的なのだろうか。ともかく昼食を済ませ、小野氏が円仁の通過点とみている官底鎮へと向かった。

（三）渭南市臨渭区官底鎮、西安市閻良区関山鎮

「行記」によると、円仁は故市店天王院から「西に行くこと廿五里（約一三キロメートル）」で永安店に、そこからさらに「西に行くこと卅五里（約一八キロメートル）」で新店に至り、その後は「南に行くこと三十里」で櫟陽県に至る。小野氏は、同州靡化坊天王院から櫟陽県への距離は西行六〇里、南行三〇里であることから、その間は直線的な行路を採らず、同州から三原県（西安市の北、咸陽市に属す）に向かう大路（現在の省道一〇八号線に該当するか）を用い、その途中から南下して櫟陽県に到ったとする。そして故市鎮―（西行）―官底鎮―（西行）―関山―（西行）―康橋鎮―（西南行）―櫟陽県というルート案を提示し、永安店を官底鎮に、新店を康橋鎮（現在の康橋村）に比定している。

下邽鎮から官底鎮へと西に進み、官底鎮人民政府（役所）の前で地名を確認する。聞き込みができる様子ではなかったため、関山鎮へ向かうことにした。一三時四〇分に付馬幼稚園の前に着く。「付」は「傅」と音通し、さらに「傅」は「傳（伝）」と誤記されやすいことから、伝馬、すなわち駅路や駅家との関連を想定したのであるが、近隣の住民に聞き込みをするも、「傳馬」が「傅馬」に転化したとの情報は得られなかった。ただ、以前は副馬を意味する「駙」が用いられ、現在は偏を省略して「付」を用いるという話を聞いた。

一四時四分、渭南市から西安市へと移り、関山鎮に到着する。人通りの多い関山民俗商店街で聞き込みをおこなうと、かつて故市鎮と関山鎮を結んだ道路の存在を知る人と、知らない人とで分かれた。また故市鎮とその西に位置する田市鎮とを結ぶ道路は存在したといい、円仁は現在の故市鎮―田市鎮―関山鎮とを移動したが、田市鎮からの北上ルートは記さなかったのではないかという仮説が立てられた。聞き込みを続けると、商店街は新開地であり、古くから存在する関劉の住民に話を聞くとよいとの助言を得た。一四時二四分、手がかりを求めて関劉に移動する。こちらでも故市鎮から伸びる道路に関して情報収集を試みたところ、ある老人から、官劉村一帯はかつて永富鎮といい、狭い土の道が存在したこと、それは人や木製の車輪が付属した牛車が通るのに用いたこと、そして一九五〇年代まで存在したことを教えてくれた。土道が通っていた場所まで連れて行ってもらうと、現在整備された道路を東西に横断するかたちで、わずかに痕跡が残っていた。さらに詳しく話を聞くと、東は午前中に見学した慧照寺のある下邽鎮、そして故市鎮に至るといい、田市鎮を経由せずに延びる道であるという。現道路を挟んで反対側の窪地は西南方向に延び、櫟陽鎮に至るとも教えてくれた。前者は直線

写真７（右）　故市鎮へと続く道路跡（佐藤長門氏撮影）
写真８（左）　櫟陽鎮へと続く道路跡（田中史生氏撮影）

的な畦道として遺っている（写真７）が、後者はゴミ捨て場と化していた（写真８）。下邽鎮を経て直線的に「故市鎮」に至るとすれば、やはり「故市鎮」は現在の位置よりも北側に所在したことになろうか。

（四）西安市閻良区櫟陽鎮

円仁が通ったと思しき新旧故市鎮から西へ向かうルートを確認し、次は小野氏が「新店」に比定する康橋村に向かう。一五時一七分、そこで地名と、櫟陽鎮へとつながるとされる土道を確認した。現在その道は拡張・舗装されている。「新店」という地名を尋ね回るも、知る人はいなかった。ただ櫟陽鎮までの距離は約一八キロメートルだといい、それは「行記」の記載（南行卅里）と合致する。一五時三〇分、石川河を越えて南下する。二〇分ほどバスを走らせ、邰家村付近で用水路と並行する、南西へと延びる斜めの道を確認した。河野氏によると、この道は櫟陽鎮まで延びるという。また現在は途中で途切れているが、康橋村へとつながる可能性もあるらしい。

櫟陽鎮は、円仁が八月十九日に到着して食事をとった「櫟陽県」に比定される。そこで円仁は時の皇帝・文宗の埋葬をおこなった一行に遭遇し、その様子を「県の南において山陵使が廻りて京城に入るを見たり。これ開成天子を葬るの使なり。営幕の軍兵の陳らび列なること五里、軍兵は大路の両辺にありて対し、百姓人馬車の中路より過ぎるを妨げず」と記録している。

一六時一一分、櫟陽鎮に入る。ちょうど櫟陽鎮の看板がみえた頃、バスを停車させた。Google Earthによると、櫟陽鎮を中心として東北から南西へと延びる線が確認できたためで

ある。現在の道路より一段下がったところに旧道路および橋が遺っており、「櫟陽古橋」と刻まれた碑が建っていた。「西安市文物保護単位」に指定されているにもかかわらず、周囲は石炭と生活ゴミが散乱していた。旧道路は直に接続していないものの、先に邰家村（さらに延長すれば康橋村）付近で確認した道路の方向に延びている。また地図上で南西に辿ると、櫟陽鎮内の櫟陽村へとつながっている。つまり康橋村と櫟陽鎮、両地点を結ぶ斜めの道を確認したことになり、小野氏が指摘するように、「新店」を康橋村付近に比定し得る蓋然性が高くなった。

本研究会による二〇〇八年度の調査で、櫟陽中心小学の敷地内にある「櫟陽縣修学碑」を実見し、その碑文の内容から現在の櫟陽鎮が唐代の櫟陽県と同一地であることを確認している。[10] 調査地点を接続させるため、櫟陽古橋から櫟陽中心小学へ向かった。一六時三八分、小学校に到着したが、門が閉まっていて入れなかった。やむを得ず地名の確認だけを済ませて、「三家店」推定地へと向かった。

円仁は山陵使に遭遇したあと、「橋を過ぎて南に行くこと五里、三家店に到りて仏殿に宿」している（十九日条）。「橋を渡」る、すなわち渭河を越え、南に五里（約三キロメートル）進むと「三家店」が所在したというが遺称地名はみえず、小野氏も「道程から推測して王十字という部落辺に当るだろう」と指摘するにとどまる。当初調査の予定には入れていなかったが、『外邦図』には現在の東興村付近に「三家店」に似る地名として「三家庄」がみえており、手がかりを求めて訪ねてみようとの提案から、櫟陽村を出て南に進む。一七時一分、東興村に到着する。村人に聞き込みをおこなうも、「三家庄」は知らないという。ただ、かつて存在したという「山西庄」は『外邦図』に「西庄」として、また東興村の西側に位置する郝邢村は「郝邢家」、三義村は「三義村」として記載されており、周辺の地名は遺存している。とすると、『外邦図』にみえる「三家庄」は東興村に比定できると考えられる。[11] 東興村より隣村に嫁いだ方が情報を有している可能性があると冗談めかしながら、ひとまず郝邢村に移動して聞き込みをおこなう。そこでは郝は村の西側の居住者の姓、邢は東側の居住者の姓という村名の由来を聞くことはできたが、「三家庄」について知っている人と出会うことはできなかった。以上で円仁が長安に至るまでの地点をすべて踏査したことになり、巡礼ルートの追体験はひとまず終了となった。

車高制限につき高速道路を利用できず、宿舎「光明大酒店」に到着したのは一九時九分であった。この日も夕食は宿舎のレストランでとることにした。その後、調査の成果や確認できなかった地点に関する議論をして就寝した。

第五日目　十二月二十八日（日）

この日は西安碑林博物館の見学と、西安博物院に張全民氏を表敬訪問することが予定されていた。八時三五分、バスに荷物を積み込み、西安へ向けて出発した。

（一）碑林博物館

一〇時七分、灞河を渡って西安市街地へと入る。一〇時四五分、西安碑林博物館に到着する。閑散期であったため、半額で入場券を受け取ることができた。入口では博物館の研究員で、石見氏が指導した留学生のご両親である王建岐氏・劉蓮芳氏夫妻が出迎えてくれた。両氏にご案内いただき、館内へと入る。

碑林博物館は、石碑や墓碑、墓誌銘、金石文、石彫刻など貴重な文物を多く収蔵し、「中国最大の石造の書庫」と称される。唐代の石碑を収蔵するため、北宋の元祐二年（一〇八七）に孔子廟跡に設立された「西安碑林」が母体であり、一九九四年に孔子廟跡を含む古代建築物群を拡充して西安碑林博物館として設立し、現在では「全国重点文物保護単位」となっている。

屋外には玄宗宸筆の「孝経」石碑があり、四つの三角形の石碑を組んで方形状に立っていた。第一室には、円仁入唐直前の開成二年（八三七）に作成された、孝経・論語・詩経などが刻まれた「開成石経」が陳列されていた。「開成石経」は合わせて一一四石、二二八面、のべ六五万二五二文字が彫られていた。膨大な量に圧倒されていたため、王建岐氏は我々が日本人ということもあり、現在の日本の元号・平成の典拠となった『書経』（尚書）を選んで解説してくれた。残念ながら筆者は勉強不足で、「地平天成」が刻まれている部分をみつけることはできなかった。次いで第二室では、古代キリスト教関連の古碑「大秦景教流行中国碑」が展示されており、中国と外国との文化交流に思いを馳せ、また会昌の廃仏等の弾圧を逃れて現存していることの貴重さを痛感した。第三室では前秦の建元三年（三六七）の年紀をもつ碑があったが、上部に人為的な穿孔が認められた。一説には、碑に穴をあけ、そこに棒を通して運んでいたと

いう。また西安市で下水道の工事中に発見された「司馬芳残碑」（上半部のみ）は、民家の階段として使用されていたという驚くべき逸話があるそうだ。第四室では宋代から清代の石碑が陳列されており、採拓作業中であった。しばらく見学していると、金子氏・石見氏は体験させてもらっていた。その後、別館へと移動して石棺を見学した。亀形の蓋など、日本では珍しい形状の石棺を多数陳列しており、そのなかの一つには「開者即死」と、物騒な文言が刻まれていた。

（二）西安博物院

王建岐氏・劉蓮芳氏と別れたあと、市街地で昼食をとる。一四時、西安博物院に到着する。受付で一人ずつパスポートを提示すると、無料で入場券を受け取ることができるのだが、受付の女性は一〇名分のパスポートの確認が面倒とばかりに嫌な顔をしたものの、薛氏の説得により入ることができた。薦福寺および小雁塔を見学したあと、張全民氏と面会した。考古実習室の会議室に通され、そこで張氏より、二〇一四年の西安における発掘調査の概要について説明を受けた。

会談は一六時一〇分まで続き、活発に意見交換がなされた。我々は一旦、張氏と分かれて宿舎へと向かった。初日と同じ、古都新世界大酒店である。この日の夜は、張氏、そして拝根興両氏を囲んだ会食を宿舎内のレストランで催した。我々は両氏に本調査の成果を説明し、両氏からは現地研究者の関心の所在や研究動向の教示があり、古代東アジアにおける仏教を介した交流に関する研究に資する知見を得ることができた。先日と同様、歓談に時を過ごして親睦を深めた。

第六日目　十二月二十九日（月）

八時三五分に宿舎を出発し、西安咸陽国際空港へ向かった。空港に到着後、チェックインの際に各自持参していた使い捨てカイロを、数日遅れて帰国する金子氏に譲渡した。西安咸陽国際空港のチェックは厳しくなり、機内に預ける荷物にもカイロは入れられないのである。時勢によるのか、近年ますます警備が厳重になっているようである。調査に同行いただいた薛・周両氏、そして金子氏とはここ

で別れ、MU二二五一便で北京へ向かった。一一時一〇分に離陸し、順調な運航で一三時に北京首都国際空港に到着した。シャトルバスを利用して手荷物を受け取るターミナルに移動し、さらにモノレールで国際線のターミナルへと向かう。往路のように焦ることもなく国際線ターミナルに到着した我々は、出国の検査を受けた。筆者が並んだ列は女性客が多く、目の前の女性はアクセサリー類を外さずに検査を受けたため、機械が反応し続けていた。すると遅々として進まない列をみかねたのか、検査員は筆者に「通過してよい」とジェスチャーで伝えてきた。隣の列では、ほかのメンバーが折りたたみ傘を危険物ではないと説明するのに苦労していた。各自お土産を購入し、NH一二六〇便に乗り込んだ。ほぼ定刻通り一五時五二分に離陸し、日本時間の一九時二五分に羽田空港に着陸した。入国手続きを済ませ、到着ロビーにて解散した。

おわりに

「入唐求法巡礼行記研究会」による二〇一四年度の調査では、円仁が五臺山の巡礼を終え、帰国の途につくため長安へと向かう行程の一部を辿った。これまでの調査と合わせると、円仁の「入唐求法巡礼」の往路の調査を完遂したことになる。今回の調査で得られた成果のなかでも、大荔県から「王明店」比定地へと延びる道路遺構、故市鎮と関山鎮とを結ぶ道路遺構、康橋村から櫟陽村へとつながる道路遺構を確認できた点が特筆される。かかる道路遺構は円仁の巡礼ルートの復元だけでなく、古代中国における交通を考えるうえでも、今後さらに詳細な検討が必要になるだろう。また故市鎮移転の情報は、その土地を熟知する「古老」への聞き込みがなければ得られなかったが、「古老」から若者への「口伝」が途絶えつつあるという、日本とも共通する現代社会の問題を目の当たりにした。加えて史跡・遺跡群が開発や老朽化によって急速に破壊され、ここ数年のうちに円仁など入唐僧の行程や東アジアにおける仏教交流を考える貴重な資料が消滅する可能性が現実味を帯びており、本研究会による現地調査の重要性および緊急性を改めて痛感した。

注

(1) 円仁および「行記」にかかわる論考は、「『入唐求法巡礼行記』関係文献目録稿」（佐藤長門編『遣唐使と入唐僧の研究』所収、高志書院、二〇一五年）を参照。

(2) これまでの調査は以下に掲げる紀行文で報告されており、あわせてご参照いただきたい。酒寄雅志「円仁の足跡を訪ねて―山東半島―」（『栃木史学』一九号、二〇〇五年）、平澤加奈子「同（Ⅱ）―山東から河北へ―」（『同』二一号、二〇〇七年）、田中史生「同（Ⅲ）―河北から山西へ―」（『同』、二〇〇八年）、佐藤長門「同（Ⅳ）―江蘇省―」（『同』二三号、二〇〇九年）、石見清裕「同（Ⅴ）―西安―」（『同』二四号、二〇一〇年）、河野保博「同（Ⅵ）―山西省　五臺山・忻州・太原―」（『同』二六号、二〇一二年）、笹生衛「同（Ⅶ）―山西省―」（『同』二七号、二〇一三年）、柿島綾子「同（Ⅷ）―洛陽・登封（嵩山）・鄭州―」（『同』二八号、二〇一四年）、溝口優樹「同（Ⅸ）―山西省―」『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』第四十七輯、二〇一六年）。

(3) 溝口優樹「同（Ⅸ）―山西省―」（前掲注2論文）。以下、二〇一三年度調査の成果はこれによる。

(4) 石見清裕「円仁の足跡を訪ねて（Ⅴ）―西安―」（前掲注2論文）。

(5) 『三国志』魏志、武帝紀、建安十六年（二一一）三月条、七月条、九月条など。

(6) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第三巻、鈴木学術財団、一九六七年。以下、小野氏の見解はこれによる。

(7) 諸史料における朝邑県―同州間の距離の異同については、朝邑県の移転の可能性を含めて今後の課題とする。

(8) 『隋書』帝紀第一、高祖上。

(9) 「舎利塔下銘原石」の拓本は、『陝西碑石精華』（三秦出版社、二〇〇六年）三〇頁に掲載されている。

(10) 石見清裕「円仁の足跡を訪ねて（Ⅴ）―西安―」（前掲注2論文）。

(11) 現在東興村は渭河の北側に位置しており、「橋を過ぎて南に行くこと五里、三家店に到」るとする「行記」との整合性については、改めて検討しなければならない。